

No.26



2013.6

(目次)

● 巻頭言		
京都大学における教育学研究科のポジショニング	研究科長	前平 泰志
● 研究ノート		
教員から	教育学講座 教授	駒込 武
院生から	教育学講座 博士後期課程2年	福井夕希子
● 社会人院生から	教育科学専攻(専修コース) 修士課程1年	小菅 里子
● 留学生から	教育方法学講座 博士後期課程2年	鄭 谷心
● 学部生から	現代教育基礎学系4回生	曾我部 和馬
	教育心理学系4回生	藤原 智之
	関連教育システム論系4回生	城戸 恭平
● 附属臨床教育実践研究センターから		
臨床心理実践学講座 教授 附属臨床教育実践研究センター長		松木 邦裕
● 教育実践コラボレーション・センターから		
心理臨床学講座 教授 教育実践コラボレーション・センター長		桑原 知子
● デザイン学大学院連携プログラムから		
教育認知心理学講座 教授		子安 増生
● 京都大学東京オフィス連続講演会「東京で学ぶ京大の知」報告		
臨床実践指導学講座 教授 副研究科長		皆藤 章
教育認知心理学講座 教授		子安 増生
教育学講座 教授 副研究科長		鈴木 晶子
● エフエム京都“Kyoto University Academic Talk”出演		
教育認知心理学講座 教授		楠見 孝
教育方法学講座 准教授		西岡 加名恵
● 卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム報告		
教育学講座 教授 副研究科長		鈴木 晶子
● 事務室から		
教務掛		石井 絹子
● 図書室から		
図書掛長		奥野 雅子
● 諸記録		10~13
①おもな出来事 ②入試結果 ③学位授与件数 ④教育職員免許状取得状況 ⑤人事異動		
⑥科学研究費補助金 ⑦外部資金受入れ ⑧ハラスメント防止に関する研修会		
● 諸報		13~14
新任教員・事務職員紹介・訃報		

# 巻頭言

## 京都大学における教育学研究科のポジショニング

研究科長・学部長 前平 泰志



教育学部・教育学研究科の主たる任務は、本学部・研究科の学生・院生を教育し、同時に自らの専門分野の研究を行うことにある、ということについては、どなたも異論のないところでしょう。

本学の基本理念にも、研究と教育が大学の根幹であることが謳われていて、「自由と自主に基づいた研究」、「対話を根幹とした自学自習」の強調がなされています。教育学研究科の面白さと強みは、この研究と教育が緊密に結びつき、永続的に展開されている点にあります。これについては他のところで述べましたので繰り返しません、そのような独自性を別にすれば、研究と教育は、一般的にどの学部や研究科も行なっていて、当たり前すぎる真理であり取り立てて言うほどのこともありません。

しかしながら、他に追従できない本研究科ならではの強みを持っているものが、もうひとつあると私は考えています。それは、大学内部の各種委員会等への教育(学)的・心理学的な見地からの専門分野を生かした貢献です。大学自体が教育機関ですから、当たり前といえば、当たり前ですが、この職務は、他の学部・研究科の教員にとって、自分の専門分野以外のサムシングになってしまうのと異なり、教育学研究科の教員にとっては、直接専門に結び付いたものとはまでは言えないとしても、理系の研究所やセンターの教員が、大学の教育的なマターに取り組むのと比べてみれば、大きな違いがあるのではないのでしょうか。(もちろんこのサムシングの意味は、人によって様々です。大学の教育・研究以外の職務を雑務、雑用と呼んで、できるだけ関わらないよう努めている教員がいる一方で、教育の専門家以上に大学運営に熱心に関わる教員が見受けられるのも事実です。)

その意味では、教育学研究科の教員の活躍に、学部内だけでなく、全学において大きな期待が寄せられていますし、またその任によく応えていると自負しています。教育学部の枠内にとどまらず、大学自体が教育や心理の専門分野を生かす広大な教育のフィールドになっていることにあらためて気づかされます。

最近、それを強く感じたのは昨年度京都大学に起こった一連の「改革」の流れのなかにおいてです。昨年度(平成24年度)は、法人化後の京都大学にとってターニングポイントとして記録されることになるかもしれない大きな出来事が二つありました。

ひとつは、国際高等教育院の設立、もうひとつは、新しいタイプの大学入学試験を実施することの発表です。

国際高等教育院の設立は、京大の教養・共通教育をより強化することを目指して制度的、組織的な改編が行われたものです。国際高等教育院は、これまであった高等教育開発推進機構を廃止して京都大学における教養・共通教育の実施、企画及び運営、評価を総括する組織として、全く新たに設置されました。昨年度一年間は、この組織の立ち上げをめぐる激しい議論のやり取りが続いてきました。ただ、組織が立ち上がり、制度が少しずつ出来上がっていている現在、教育学部としては、これから入ってくる若い世代により良い教育の場が提供されることを願うばかりですし、願うだけでなくそのような組織と制度を、教育院と協力、連携しながら、作り上げていかねばなりません。新しく立ち上げられた組織には、教育学の知見がたくさん必要なことは言を俟たないことでしょう。

京都大学の特色入試については、3月末に松本紘総長はじめ10学部長等が検討結果に関する記者会見を行ない、平成28年度より、従来の入試に加えて、全学部で特色入試の実施することを発表したことは、記憶に新しいことと思います。教育学部は、その席上で従来の学力試験で評価できない能力をいかに測るかという問題意識からパフォーマンス評価を重視したタイプの入試を実施すると公表しました。昨年度一年間、総長裁量経費をいただいて高大接続を基礎とした入試方法の改善を目指す研究会「多次元入試研究会」を続けてきましたが、この新しい入試方法の決定は、この研究会の延長線上に位置付くものです。特色入試の詳細は、いずれ今後学部内の委員会で十分な検討を経て遠くないうちに全学的に公表される予定ですが、これについても教育学部は全学的なリーダーシップが期待されています。

このように、教育学研究科の教員は、これまで以上にきわめて忙しい日々を送っているわけですが、これらの活動は大学のなかでの研究科の立ち位置(ポジショニング)とアイデンティティを再認識する上にも大切なことです。そのことを各人が自覚し、献身的に取り組んでいることを知っていただければ幸いです。

# 研究ノート

## 教員から

### ネットの進化と研究の遅滞

教育学講座 教授 駒込 武



この10数年のあいだ、日本植民地支配下台湾におけるキリスト教系学校にかかわる研究してきました。現在、これまでに書いた論文を単著という形式にまとめる作業を進行中です。この作業のなかで、否応なく気づかされたことがあります。ネットの進化により研究をめぐる環境が激変しており、むかし書いたものをそのまま用いることはとてもできないことです。

この研究に着手したのは1996年のことです。英国の北部スコットランドから台湾に派遣された宣教師たち、「極東」における新興帝国の担い手として立ちあらわれた日本人、そして、これらの外来者と交渉しながら自分たちの生きるスペースを見出そうとした台湾人。これら三者のからまり合う歴史のなかで、学校教育に託された意味を問い直そうとしてきました。

資料調査の範囲は英国やカナダから台湾まで多岐にわたりました。台北の図書館でマイクロフィルムを回して新聞記事を調べ、台中から1時間あまりもバスに乗って台湾総督府の公文書を探しに行きました。資料を求めての旅は、楽しくもありました。

ところが、数年前からこれらの資料はネットで検索し、ダウンロードできるようになりました（台湾の中央図書館を訪れてIDを取得することが必要ではありません）。この研究に着手した頃はパソコンがようやくカラーになった時期であり、ブロードバンドも普及していませんでした。ネットで資料をダウンロードできる事態は想像できませんでした。今ではキーワードを入れれば、それに関連する資料がずらりと出てきます。おかげで見落していたものが山ほどあることに気づきました。こんな資料も、あんな資料もあったのか…。うれしい悲鳴のなかで、論文を改訂する作業はともすれば遅滞しています。知らない方が幸福だったかも… という思いもふと頭をよぎり、マイクロフィルムをぐるぐる回していた時代が懐かしいとノスタルジアにふけったりもしながら、ノロノロと再度の資料調査を続けています。

## 院生から

教育学講座 博士後期課程2年 福井夕希子

西谷啓治を研究しています。十九世紀最後の年に生まれ、二十世紀、人生は無意味だというニヒリズムの忍び寄る時代に、人を救うものとしての宗教を継ごうとした哲学者、と言えるのでしょうか。「継ぐ」という言葉は必ずしも的確な表現ではないかもしれませんが、西田幾多郎、鈴木大拙、あるいはハイデガーと、彼の師と呼べる大家は多く、「次世代」的なものが彼の哲学の一つの特徴であるようにも思います。それはただ先人の思想を学び伝えるということに留まらず、先人が自らの思想へと至った道のりをたどり直し、自分自身の思想を自らが生み出すということを通して、今に生ける思想として先人の思想を蘇らせ、ついには両者の思想を媒介する普遍性、普遍たる生命をまた次の世代へとつないでいくような試みでもありました。

今日、教育学分野に限らず重要視されるものに「個性」があります。「個性」が意味するものにも様々な解釈がありますが、ひとつは「独創性」と言い換えることができると思います。独創性という言葉は英語ではOriginality、すなわち起源性と

いうこととなりますが、生きとし生けるものは、また自らの外部にOriginを持つものでもあります。遺伝子に刻まれた命の系譜、生命が持つ過去の記憶。それが今生きる私たちを私たち自身の姿にしています。西谷にとって先人に学ぶことは、己自身の思想を形作ることと同義でした。オリジナリティとは独自性であると同時に、自らを先人達の系譜へと連ならせる絆でもあるのだと思います。西谷は「個性」が他の「個性」と理解しあい、生き生きと共存する世界への確かな希望を持っていました。

この世にあるすべてのものは、触れ合い、関わり合って存在しています。しかし、西谷の世界観の中では、それはただ支え合っただけでなく、それでもなおそれぞれが個としてあるという、矛盾した不思議なものとして存在しています。その矛盾を抱えながら存続する世界は、西谷においては「故郷」と呼ばれることもありました。教育研究が人々の故郷を守れる学問であるように、微力ながら力を尽くして参りたいと思います。

## 社会人院生から

教育科学専攻(専修コース) 修士課程1年

小菅 里子



10年間の教員生活を経て、私がもう一度学びたいと思った大きなきっかけは、在外教育施設で勤務した2年間での2つの『目覚め』でした。

1つ目は、「日本人意識」の目覚めです。異国に暮らし、異国の人との関わりが深くなる中で、私たちの背負っている「日本」という看板を強く意識するようになりました。私は、教育に関わる人間として、世界に誇るべき日本の伝統を大切にし、世界のリーダーとして尊敬される日本をつくるために一役買いたいと強く思いました。

2つ目は、「異国の教育への興味」の目覚めです。派遣教員としての職務は、赴任した在外教育施設に在籍する日本人児童生徒への教育が中心でしたが、派遣国の現地教育事情等について調査・研究を行うことも含まれていました。この調査・研究を通じて、教育はその国の歴史や文化、社会状況、国家理念等を反映しており、教育を知ることはその国を知ることにつながるかと改めて感じました。そして、これまで私が身をおいてきた教育

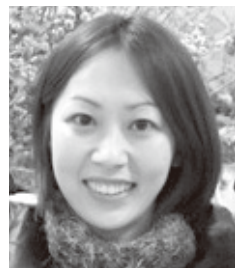
の視点からより広い世界を見たいという思いが芽生えました。

これらの目覚めが私を比較教育学研究の道へ誘うことになりました。念願かなってその道は開け、大阪府の「現職教職員長期自主研修制度」を利用して休職し、教育学研究科に入学することができました。まだ入学して日も浅いですが、京都大学教育学研究科での研究は、入学前に期待していた通りだと感じています。知識と経験の豊富な先生方が研究をサポートして下さること、ともに学ぶ院生の方みなさんの能力とモチベーションが高いこと、蔵書の豊富さやIT環境、学習スペースといったハード面が充実していることなど、とても恵まれた環境に身を置けることをうれしく思っています。研究がうまく進むかどうか、あとは自分次第です。スタートから躓くことが多く、日々悩み苦しんでおりますが、そのようなことも自分を成長させる糧だと前向きにとらえて邁進していきたいです。

## 留学生から

教育方法学講座 博士後期課程2年

鄭 谷 心



京都で桜の季節を過ごすのは、今年で5回目となりました。振り返ると、長いようで短いような4年間でした。長いと感じるのは、学問には深さと広さがあり、探究には終わりがいいからだと思います。短いと感じるのは、清々しい桜の季節、色とりどりの紅葉の道、日本人々との楽しい会話と触れ合いなど、たくさんの喜びがあるからだと思います。

私は中国の重慶生まれ、成都に育ちました。上海の大学で4年間日本語を専攻しました。その後、日中合併企業の日本語マーケティング助手として約1年間、日本語教師として半年間はたらきました。この経験を経て、日本へ留学することを決心しました。教師としての専門性を高め、より円滑に日本人と関わり仕事をするために、留学を強く希望するようになりました。たとえ期間が短くとも、日本の文化・風土・慣習について身をもって学ぶことができるなら、ある程度の収穫だと考えていました。しかしながら、京都大学にて優れた先生方、先輩方とともに「学問の探究」を始めるなかで、その魅力にひかれ研究の道に進むことを決心しました。

来日当初、私は生活綴方という子どもの「ありのまま」の現実を大切にする作文教育方法に関心を持ちました。

なかでも、私は随意選題論に興味をもちました。必ずテーマが指定される中国の作文の教え方に比べ、随意選題論の自由な教え方が挑戦的かつ魅力的だったのです。芦田恵之助の随意選題論について論文を1本完成させた頃、田中耕治先生が中国でもそのような流れがあったのかと尋ねてくれました。それをきっかけとして、近代中国において活躍した国語教育者である葉聖陶の教育理論と実践を探究しています。日本の生活綴方教育を相対化して検討するために、近代中国における生活作文教育の流れを明らかにする必要があると考えたのです。「学問の探究」は、苦しみと楽しみの両面を持ち合わせています。苦しみを乗り越えて、より一層「学問の探究」を楽しむため、今日も明日も頑張りたいと思います。



## 学部生から



現代教育基礎学系  
4回生

### 曾我部和馬

私は三年次編入生として教育学部に入学しました。以前は同じ京大で社会学を学んでいましたが、流されるように学生時代を過ごし、何も得ないまま卒業してしまいました。そのことを恥じ、再び学び直すことを決意しました。

当初は学校教育に関心がありましたが、学んでゆくうちに学校に限らない人間一般の成長に興味を持つようになりました。

そこで出会ったのが、教育人間学という分野です。先生方の指導のなかで、日々自分の未熟さを痛感させられます。すると自身の成長に向き合うことになるので、ある意味自分の人生を題材にして学問ができ、非常に面白い領域だと思います。

また、思索を深められるのは仲間のおかげでもあります。互いにアイデアを交わすなかで刺激を受け、漲る知的好奇心を存分に晒すことができました。学生がやはり優秀なため、この恵まれた環境に満足するとともに財産として誇りにも感じています。

今は大学院への進学か、就職かで悩んでいます。どちらにせよ卒業時に後悔しないよう、何か一つ自分なりの成果を残し、さらに一生付き合っけてゆけるテーマを浮き彫らせたいと考えています。その実現のため、この一年は貪欲に幅広く思想を学んでゆくつもりです。



教育心理学系  
4回生

### 藤原智之

32年間勤めた地方自治体を早期退職し京都大学教育学部に3年次編入して、はや1年以上が過ぎました。劇的な環境の変化のせいか、入学当初はしばしば、現在と過去が入り混じって目の前に現われているかのような、浦島太郎さながらの不思議な現実感に囚われたものです。

人文社会科学の変化にも驚かされました。もはやマルキシズム

の影響は感じられず、かつては書店の現代思想コーナーで目にする存在であった、構造主義やポストモダンなどの著作の多くが、今やアカデミズムの世界のなかで確固たる地位を占めていることに、歳月の流れを強く感じました。

さて、教育心理学系のカリキュラムは、認知、臨床の両分野をカバーする非常に充実した内容です。心理臨床を一から学ぶため入学した私にとって、心理学の基礎を固める最高の場であることを実感しています。ときに学問の厳しさを痛感しながらも、知的探求の喜びを深く味わっています。

私にとっての、この新しい人生のフィールドで、素晴らしい若者たちと交流しながら、異世代の学生として知的冒険を続けるとともに、この貴重な経験から得たものを、たとえ僅かでも、何らかの形で社会に還元したいと考えています。



相関教育システム論系  
4回生

### 城戸恭平

京都大学に入学し、いよいよ最終学年になりました。時の経つものは早いと日頃感じております。私は高校生の頃教員を志し、教育学部に入学しました。教育を多角的な視点から学び、時代の趨勢を眺めているうちに、世界の教育現場について興味を抱くようになりました。私たちが日本で受けた教育はカリキュラム・学校制度など一見当たり前のように思われがちですが、世界と

いう枠組みから見るとその中にも新たな発見が得られます。現在は卒業論文という目標に向かって、日々楽しみながら勉学に邁進しております。

また、教育学部は一学年の人数は少ないものの、その分深い繋がりのある交友関係ができます。私自身友人に恵まれ授業やサークル活動で顔を合わせるたびに、他愛のない世間話から将来への展望に至るまでざっくばらんに言葉を交わしています。こうして気軽に相談ができる友人を得られたことは生涯にわたる財産です。

最終学年を迎えるにあたって社会に目を向ける時期がやってきました。私は、これまでの三年間に培った知識や交友関係、人生経験を糧に躍進していきたいと思っています。

## 附属臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座 教授 臨床教育実践研究センター長 松木 邦裕



今日に至るまで臨床教育実践研究センターは、市民に広く開かれた心理臨床実践としての心理教育相談室(室長 角野善宏教授)での地道な日々の臨床活動をその基盤に置いています。その基盤からの進展として、学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」活動(室長 皆藤章教授)、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊等、教育・実践・研究活動を進めています。今回は、それらの現在をご紹介します。

今年の8月に開催します第17回リカレント教育講座は、「『心の教育』を考える 一家族への支援と対応」を新たなテーマとして鋭意準備を進めています。プログラムとしては例年通り

シンポジウムやスモールグループでの事例検討を行います。討議に時間配分を多く割り当てます。昨年以上の多くの参加者による創造的な討論が期待されます。

東日本大震災被災者への支援を実践しているこころの支援室では教員、学生が協働し積極的な支援活動を行っています。京都大学医学部附属病院精神科・神経科、京都市内の精神保健医療機関との連携で「京都心のケアチーム」として福島県での児童・保護者・教職員への支援を行いました。さらに関西圏に避難・移住してこられた家族の支援を実施しています。

臨床教育実践研究紀要は第16巻が本年3月に刊行されました。本号は18編という例年にも増して多くの研究論文を収めており、当センターでの臨床研究の充実がうかがえる豊かな内容です。

皆様のこれまでの暖かいご支援に感謝いたしますとともに、これからも御支援賜りますようお願い申し上げます。

## 教育実践コラボレーション・センターから

心理臨床学講座 教授 教育実践コラボレーション・センター長 桑原 知子



教育実践コラボレーション・センターの活動が、昨年度からは、教育学研究科の日常的な実践として行われてまいりましたが、無事に一年を過ぎ、今年度は二年目に入りました。

昨年度末には、コラボレーション・センター所属教員が執筆に関わった「最終報告書」(『円環する教育のコラボレーション』)もまとまりましたので、ぜひお目通しくださいませ。コラボレーション・センターの活動は、平成19年度から実施されてきた「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」のコンセプトを継承するとともに、新しい展開もすすめております。

新しい展開の中心をなしているのは、他の機関や学校との連携(コラボレーション)です。たとえば、京都家庭裁判所との間では、離婚後の親子関係をめぐる問題解決や、非行少年に対する、親を巻き込んだ更生プログラムの構築など、現代の家族関係に踏み込んだ取り組みを行ってまいりました。毎月、本学法学部の先生方にもお出でいただき、家庭裁判所・調査官の方々とともに、研究会を開催し、議論を深めております。また、3月7・8日には、童仙房にて、これまで慎重に検討を進めてきた「親子合宿」が実施され、意義が認められました。このように、現代の家族・親子

の問題について、現場に密接にかかわるかたちで理解と貢献を目指す活動を行っております。

また、高大連携の活動も盛んです。たとえば、和歌山高校とは、密接な連携を図りながら、生徒がいかにか有能性と生命性を高めることができるか、さまざまな立場からともに知恵をしぼり、実践をおこなっています(和歌山高校・京大連携プロジェクト)。こうした取り組みに関わる院生たちは、さまざまな講座に属しており、講座を超えて連携(コラボ)するという、従来にはない教育実践がおこなわれており、教育的意義も高いものと思われま。

このように、コラボレーション・センターでは、今喫緊の課題となっている、教育の諸問題について、これからも積極的に関わっていくつもりであります。さまざまな活動を支えていただいている教員・研究員をはじめ、事務の方々および院生さんたちに心より感謝するとともに、今後のさらなるご協力とご支援をお願いいたします。

## デザイン学大学院連携プログラムから

教育認知心理学講座 教授 子安 増生



京都大学では、異なる分野の専門家と協働して「社会のシステムやアーキテクチャ」をデザインすることのできる博士人材を育成することを目的として、5年一貫の博士課程教育リーディングプログラム「デザイン学大学院連携プログラム」(平成24年度～30年度)を開始しました。情報学研究科の石田亨教授をリーディングプログラムコーディネータとし、情報学研究科、工学研究科(建築系、機械工学系)、教育学研究科、経営管理大学院から11専攻が参加し、京都市立芸術大学などとも連携しながら、ハブとなるデザインイノベーション拠点をJR「丹波口」駅の近くにある京都市立芸術大学(KRP)に設立し、「京都大学デザインスクール」を展開しています。また、アメリカのスタンフォード大学、フィンランドのアールト(Aalto)大学など海外の研究機関のデザインスクールと連携した国際ネットワークづくりも行っています(ホームページは右記参照:<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/>)

教育学研究科からは、教育学専攻・教育認知心理学講座の4人の教員(子安増生、楠見孝、齊藤智、野村理朗)が一昨年度の申請の段階から計画に参加し、今年度からは新たに高橋雄介特定助教がメンバーに加わりました。入学試験は、デザイン学大学院として行うのではなく、参加11専攻に入学した修士課程大学院生が選考を受けて、任意で参加していくものです。昨年3月に終了したグローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」(平成19年度～23年度)が教育学研究科全体として推進した事業であったのに対して、デザイン学大学院連携プログラムは教育学研究科の大学院生には限定的にしか開かれていませんが、デザイン学の授業や講演、スプリングデザインスクール、サマーデザインスクールなど参加の機会はいくつもありますので、うまく利用いただければと思います。

### 京都大学東京オフィス連続講演会 「東京で学ぶ京大の知」シリーズ10 教育を考える 報告

臨床実践指導学講座 教授 副研究科長 皆藤 章

平日の夕刻というのに、ほんとうに多くの受講生が集まってこられた。満員の会場でわたしは、「臨床心理学の知 ～心理療法の実践から～」というテーマで京都大学の臨床心理学について話をしました。本研究科には、かつて国立大学で唯一、臨床心理学講座が設置されていたという経緯もあり、つねに日本の臨床心理学を牽引してきた歴史があります。牽引役は河合隼雄名誉教授でした。河合隼雄先生なくしては日本の臨床心理学はここまで

発展することはありませんでした。ではなぜ、京都大学につねに日本をリードするような臨床心理学が発展したのでしょうか。河合隼雄先生はいかにして多くの後進を育てたのでしょうか。教えを受けたひとりの心理臨床家としての体験から、学んだことを語ってみました。知らず知らずのうちに熱く語っている自分がいました。とても気恥ずかしい思いをしましたが、受講生にはわたしの熱い思いが届いたのではないかと密かに振り返っています。

教育認知心理学講座 教授 子安 増生



私は、2013年2月27日(水)の夕刻に「東京で学ぶ京大の知」シリーズ10「教育を考える」第3回の講師として、「三つ子の魂、どんな魂? —幼児期の心の発達を探る」という講演を行いました。申し込み者数は182人でしたが、雨の日ということもあってか、実際に来られたのは収容定員に近い100人ほどでした。幼児の発達心理の話がテーマでしたが、小さなお子さんの親御さんというよりは、お孫さんの成長に目を細めているご年配の来聴者が少なくありませんでした。講演の後の質疑でも、「私の孫のことですが、娘は早期英才教育に熱心で、そこまでしなくてもとか、そんなにお金をかけなくてもと思ってしまいが、先生のお考えは?」

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

といった質問が出ました。元気な中高年日本人の姿は、今や日本国内だけでなく、外国に行っても見受けられ、素晴らしいことですが、子育て世代の人が講演を聞きに来られやすい体制を整えること(保育室の準備等)も今後の課題ではないかと感じた次第です。



教育学講座 教授 副研究科長 鈴木 晶子

3月6日、第4回講演「才を見極める 教育哲学の観点から」を担当しました。「才」とは何か、五感の中でも特殊な「触覚」についてお話ししました。触覚は環境世界と触れる原初的な感覚です。その働きに立ち返り、「才」について考えることで、京都学派の純粋経験や場の理論を捉え直す面白さの一端を紹介しました。会場には特別支援を必要とする方々のための建築デザインの専門家もおられ、手話通訳が入った講演となりました。2011年度から担当の放送大学TV番組「教育文化論特論」を観て佐賀県から来たという人もいました。京大工学研究科出身という方もいて、昨年、京都から東京の研究所に移られたとか。まだ馴染みのない東京で、ここに来るとほっとすると話しておられました。東京オフィスは同窓生の心の拠り所にもなっているようです。窓からは高いビル群が空に向かってそそり立ち、近未来の様相を呈していました。

## エフエム京都“Kyoto University Academic Talk”に出演しました

教育認知心理学講座 教授 楠見 孝

1ヶ月前に出演の依頼があり、大学本部渉外部を介してメールでディレクターと台本の作成を経て、4月16日の出演の日を迎えました。放送30分前にαステーションの局内に入り、聞き慣れたBGMに載せて交通情報が流れる中、ディレクターとパーソナリティの福岡さんと打ち合わせをして、すぐにスタジオにはいり、生放送が始まりました。

「情報化社会と考え抜く力」をテーマにして、批判的思考に関する話をしました。とくに、情報を鵜呑みにせず、じっくり立ち止まって考え、決めることの大切さを、「ストップ・アンド・シンク」をキーワードに、日常会話、低線量放射能による健康影響や事件報道などを例

にして紹介しました。あわせて、子どもたちへの教育の重要性と、私が行った小・中学生に対するインタビュー調査の結果を説明し、教育の効果研究の難しさや研究の醍醐味について話しました。

ラジオ出演は、自分の研究が、人々の生活にどのように役立てるのかを考え、それをリスナーに伝える良い機会となりました。出演にあたりお世話になりました皆様へ感謝します。



教育方法学講座 准教授 西岡 加名恵

4月23日、エフエム京都に出演する機会をいただき、パフォーマンス評価についてご説明しました。「民主的な国家を作るにはどうしたらよいのかについて、国連の会議に提案する政治学者になったつもりで提言レポートを書いてみよう」といった課題に取り組んだ中学生が、「自分の考えを、ひとりよがりにならないで、客観的に判断する力がついた」といった声を寄せてくれたこと。また、見るからに自信なさそうな引込み思案の小学生が、ポートフォリオ(学習成果をためるファイル)を用いながら教師と対話し、自分なりの探究を深めていく中で、自信とやる気を身につけていくことなどをご紹介しました。

緊張のあまり、3日前から「台本を忘れる」という悪夢にうなされ、案の定、当日も声が上ずってしまいましたが、DJの福岡さんの笑顔と軽妙な語り口に助けていただき、何とか終えることができました。まさしくプロの語りと臨機応変の対応という「パフォーマンス」の素晴らしさに、魅了されたひと時でした。

今回、もう一つの収穫は、準備の過程でインターネット上に掲載されているバックナンバーを聞いたことです。「京大の知」を社会に発信するニーズの高まる昨今、これは貴重なリソースだと思いました。

最後になりましたが、貴重な機会をいただいたこと、また細やかに支援して下さったエフエム京都の津崎さん、京大渉外部の中澤さん、野口さんに、感謝申し上げます。

Kyoto University Academic Talk は、京都大学同窓会(京大アラムナイ)フェイスブック(<https://www.facebook.com/KyodaiAlumni>)から視聴できます。



# 卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム報告

卓越した大学院拠点形成支援事業担当 副研究科長 鈴木 晶子

平成24年度研究拠点形成費等補助金(卓越した大学院拠点形成支援補助金)が、グローバルCOE拠点としての実績を上げてきた「心が活きる教育のための国際的拠点」(整理番号12-05)に交付され、博士課程在籍の教育・研究環境の整備を中心に事業が組まれました。

その事業の一環として、平成25年3月20日、21日の両日には、教育学研究科主催による国際フォーラム「実践知と教育研究の未来」を開催しました。基調シンポジウム「実践知と教育研究の未来」ならびにシンポジウム「医療と臨床心理ー糖尿病医療学における臨床心理学の支援」のほか、博士課程院生を中心に、国内外の研究者が集って開催した分科会は12件、ポスター発表は39件を数えました。海外からの参加した大学院生や研究者の国はドイツ、イギリス、アメリカ、韓国、中国などに及びました。分科会の内容一覧は次の通りです。

- 第1分科会「心理臨床面接スーパーヴィジョン」
- 第2分科会「人類学的思考と教育のフィールド研究」
- 第3分科会「変貌するアジアの大学院教育」
- 第4分科会「東アジアにおけるパフォーマンス評価の到達点と課題」
- 第5分科会「生涯教育実践研究の方法論:ピーター・ジャーヴィス先生と考える」
- 第6分科会「途上国教育研究の発展」
- 第7分科会「教育学の可能性」
- 第8分科会「心理アセスメントの実践的な読み解き方」

- 第9分科会「等価性と余剰性の交錯:教育学の未来を問う」
- 第10分科会「アメリカにおける小児精神科医療」
- 第11分科会「描画表現からみた見た子どもの発達・教育:日韓比較を通して」
- 第12分科会「エスノメソドロジーの可能性」

GCOEの際に繋がった国内外の研究ネットワークを基盤に、教育研究の未来を見据えた議論が活発に展開されました。また、京都大学における教育学研究の特質など、その原点を見つめ直す機会ともなりました。詳細については国際フォーラムの発表要綱集をご参照いただければ幸いです。



## 事務室から

教務掛 石井 絹子



教育学部の教務掛員として、主に窓口の対応に従事させていただいております。教育学部に勤務してから四半世紀も過ぎ、窓口のお姉さんからおばさんへと時代は流れ、「人に厳しく自分に甘く!」(笑)をモットーに、日々学生さんと接しております。我が子に接するよりも、時には厳しくしているかもしれません。「親にも怒られたことが無いのに!」とお怒りの方もいらっしゃることでしょう。「社会に出てから君たちが困らないように!」との親心だと思ってご容赦ください。提出物や決まり事さえ遵守していただければ、普段はとても優しいおばさんです。そこんとこヨロシクです。

事務処理もアナログからデジタル化され、学生さんもKULASISの導入により、便利になりましたが、全てが機械化されているわけではありません。今の学生さんは、各種証明書等自動発行機で即日交付されるので、それが当たり前となり、自動発行機では発行出来ない証明書等を窓口で請求される際、

「即日交付はできません。」と答えると、不服を申し立てます。即日交付出来ない証明書もあるということをもっと認識していただきたい!

教務掛からのお願いとして、掲示を確認するということを是非とも習慣づけていただきたいと思います。全てがKULASISで網羅できるわけではありません。掲示といえば、掲示を見る学生さんの風景にも時の流れを感じる今日この頃…昔はみんな必死にメモを取っていたものですが、今はといえば携帯電話でカシャ!「昔は。」とか、「今の子は。」とかついつい口をついて出るのは私がそれだけ年をとったということでしょうか?

なにはともあれ、先生方と協力のもと、学生支援サービスに努めていきたいと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

## 図書室から

図書掛長 奥野雅子



さて、前号で、京大の所蔵している図書や雑誌を検索するシステム、KULINE(クライン)が新しくなりました、とご紹介しました。便利に使っていただいておりますでしょうか？

実は、リニューアル後も新機能が続々、追加されています。

特に、この1月から開始した“返却期限日お知らせメール”は、前々から希望が多かった返却日の一日前に任意のメールアドレス宛へ「借りている資料の返却期限日が明日となりましたのでお知らせいたします。」とメールが受け取れるサービスです。これは京大でいろいろな図書館/室で借りていると借用期限がさまざまなため、うっかり返却し忘れる、せめて前日に教えてもらえることができれば…、という多くの方のご要望からようやく実現にこぎつきました!(担当者が頑張りました)

私自身も早速、登録してみたところ、見事(?)返却期限を忘れていた図書を無事返すことができ、あらためて便利さを実感しました。また、まだ手元に置いておきたい場合は、返却期限内であり、予約が入っていない、更新が一回目等、条件をクリアすれば、お知らせメールが届いたと同時に、MyKULINEにアクセスして

返却期限日を延長することも可能であり、一石二鳥でした。ポイントはよくみるメールアドレスに登録しておくことでしょうか。携帯の方は受信が拒否になっていないか確認をお願いします。

詳しい使い方等については、KULINE>左メニュー[図書館を使う]>[返却期限日お知らせメール]

[http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/service/index.php?content\\_id=59](http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/service/index.php?content_id=59)

をご覧ください。

また、現在、各図書館/室からの投稿のみですが、レビューやタグ機能も試行中です。KULINEトップ画面の下方、[新着タグ][新着レビュー]で一覧などをみることができます。思わぬ本との出会いがあるかも?ぜひ、ご覧ください。

これからもますます機能充実、KULINE(クライン)に、ご期待ください。

## 諸記録

### ◆ 2012年11月～2013年4月のおもな出来事

#### 【2012(平成24)年11月】

- 1日(木) 教育学研究科主催国際シンポジウム「東アジア地域における大学入試改革」ソウル大学教授 韓崇熙氏、北京師範大学教授 洪成文氏、国立台湾大学主任 洪泰雄氏(百周年時計台記念館)
- 4日(日) 附属臨床教育実践研究センター主催公開講座「精神分析とこころの解放」客員教授 Victor Sedlak氏(京都テルサ)
- 5日(月) 北京師範大学副学長表敬訪問
- 12日(月) 和歌山県立桐蔭中学校来訪
- 21日(水) 多次元入試研究会特別講演会「ドイツにおけるアビトゥアと学究能力をめぐる議論」ドルトムント工科大学教授 Lothar Wigger氏(総合博物館)
- 29日(木) 第5回多次元入試研究会「入試改革と京大予科構想:京大医学部は不治の病の治療に挑戦する医師を育てたい」医学研究科教授 萩原正敏氏(教育学部本館)

#### 【2012(平成24)年12月】

- 7日(金) 教育実践コラボレーション・センター主催 E.FORUM教育研究セミナーⅠ(教師教育研究セミナー)「大学で育てるべき教師の資質能力とは何か」(芝蘭会館別館)
- 8日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催 E.FORUM教育研究セミナーⅡ(高大接続・大学入試検討セミナー)「高大接続・大学入試の課題と展望」(文学部校舎)
- 9日(日) こころの支援室主催企画「こころとからだのリフレッシュ」(総合研究1号館)

- 13(木)-14日(金) 教育実践コラボレーション・センター主催 教育学研究科・北京師範大学院生交流会(教育学部本館)  
 14(金)-16日(日) トリコAプロデュース主催、野殿童仙房生涯学習推進委員会、教育実践コラボレーション・センター共催  
 「防災×演劇 in 童仙房」(旧野殿・童仙房小学校)

**【2013(平成25)年1月】**

9日(水) 和歌山県教育長来訪

**【2013(平成25)年2月】**

- 21日(木) ハラスメント防止に関する研修会 カウンセリングセンター講師 中川純子氏(教育学部本館)  
 28日(木) ブータン王国教育使節団表敬訪問

**【2013(平成25)年3月】**

- 7(木)-8日(金) 京都家庭裁判所、教育実践コラボレーション・センター共催 合宿研修「童仙房ワークス」(旧野殿・童仙房小学校)  
 20(水)-21日(木) 卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム「実践知と教育研究の未来」(百周年時計台記念館他)  
 23日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催 2012年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第8回実践交流会」(教育学部本館他)  
 26日(火) 教育学部同窓会主催 卒業生歓送会(教育学部本館)

**【2013(平成25)年4月】**

18日(木) 教育学部同窓会主催 新入生歓迎会(百周年時計台記念館)

**◆平成25年度入試結果**

・教育学部

日 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文 系	50	188	187	51	62
	理 系	10	41	41	11	
第3年次編入学		10	25	25	8	8

・教育学研究科

課 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース 教育科学専攻	18	31(5)	30(5)	21(3)	21(3)
	臨床教育学専攻	14	33(1)	33(1)	10	10
博士課程	教育科学専攻(専修コース)	10	47	45	10	10
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名	2	2	1	1
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)		4	3	3	2	2
博士後期課程編入学		若干名	9	9	1	1

( )内の数は外国人留学生で内数

**◆平成24年度学位授与件数**

(H25.3.31現在)

学 位 名 等		授与者数
学士	教育科学科	73
修士	教育科学専攻	24
	臨床教育学専攻	11
博士	課程博士	21
	論文博士	0

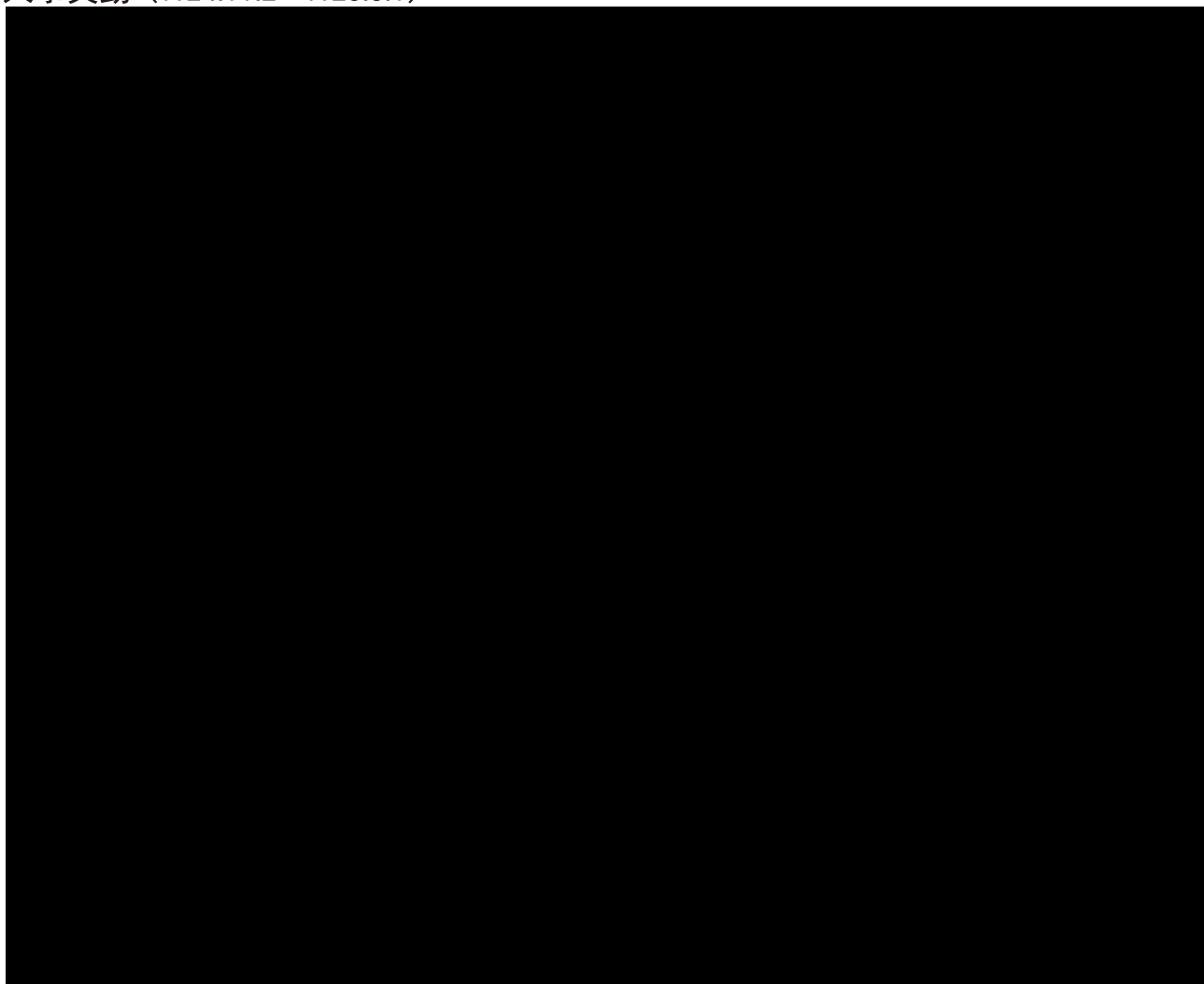
**◆教育職員免許状取得状況**

平成24年度(2012)

中学校専修免許状	1
中学校1種免許状	3
高等学校専修免許状	2
高等学校1種免許状	10
特別支援学校1種免許状	0



◆ 人事異動 (H24.11.2～H25.5.1)



◆ 科学研究費補助金

25年度

研究種目	研究題目	研究担当者
新学術領域研究 (研究領域提案型)	周産期からの身体感覚と社会的認知の発達の関連性の解明に基づく障害理解	明和 政子
基盤研究(A)一般	21世紀市民のための高次リテラシーと批判的思考力のアセスメントと育成	楠見 孝
基盤研究(B)一般	ヒトの養育行動における快情動の役割とその進化的基盤	明和 政子
基盤研究(B)一般	「失われた10年」以後の教育機会とライフコースに関するパネル調査研究	岩井 一郎
基盤研究(B)一般	青年期メディアとしての雑誌における教育的機能に関する研究	佐藤 卓己
基盤研究(B)一般	E. FORUMカリキュラム設計データベースを活用したスタンダードの開発	矢野 智司
基盤研究(B)一般	辺境における空間的・社会的移動と教育－奄美諸島の経験を基軸とした比較史的研究－	駒込 武
基盤研究(B)一般	精神力動的心理療法家のトレーニングに関する開発的研究－国際比較調査を通して	松木 邦裕
基盤研究(B)一般	パフォーマンス評価を活かした教師の力量向上プログラムの開発	西岡加名恵
基盤研究(B)一般	「新しい公共」枠組み下のソーシャル・ファイナンスを通じた教育資源調達手法の研究	高見 茂
基盤研究(B)一般	日英の女性医療専門職の生涯キャリアと養成・支援に関する総合的研究	渡邊 洋子
基盤研究(B)一般	アジアの「体制移行国」における高等教育制度の変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(B)一般	戦後日本の指導者の「ハビトゥス」形成と「界」の構造に関する実証的研究	稲垣 恭子

研究種目	研 究 題 目	研究担当者
基盤研究(C)一般	オールタナティヴ教育における「稽古」の思想と「宗教性・精神性」の教育人間学的解明	西平 直
基盤研究(C)一般	総合的な図書館・図書館史研究の構築	川崎 良孝
基盤研究(C)一般	衝動的反応の制御メカニズムの個人差の解明に関する認知科学的研究	野村 理朗
基盤研究(C)一般	セラピストの発話に関する言語論的分析と訓練モデルの構築	大山 泰宏
基盤研究(C)一般	「褒め方・叱り方のタクト」－教育力育成と信頼の場の創出に関する実証研究	鈴木 晶子
基盤研究(C)一般	新教育運動期における学校の「アジール」をめぐる教師の技法に関する比較史的研究	山名 淳
基盤研究(C)一般	<他>文化理解のための政治教育：アメリカ哲学をめぐる文化横断的対話研究	齋藤 直子
基盤研究(C)一般	途上国の中等学校等の多様化と正規性・非正規性に関する国際比較研究	杉本 均
基盤研究(C)一般	タイミング制御が支える音韻的作動記憶と長期音韻知識の相互作用	齊藤 智
基盤研究(C)一般	思考力・判断力・表現力育成のための長期的ルーブリックの開発	田中 耕治
挑戦的萌芽研究	専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究－成人教育学の観点から	渡邊 洋子
挑戦的萌芽研究	戦後日本におけるアメリカナイゼーションと女性知識人の社会学的研究	稲垣 恭子
挑戦的萌芽研究	近代日本における流言効果のメディア史的研究	佐藤 卓己
若手研究(B)	パーソナリティ特性の発達と健康の変化を統合的に理解するための縦断調査研究	高橋 雄介
若手研究(B)	高次の学力を育成する「教科する」授業の開発研究	石井 英真

## ◆ 外部資金受入れ

### ◎ 受託研究

名 称 ・ 目 的	委 託 者	担当者
(名称) 「国際バカロレア」にかかる調査研究業務 (目的) 国際バカロレア制度の導入に関する諸問題の抽出とその解決策について、具体的な説明資料を作成する。	(財)未来教育研究所 理事長 高見 茂	杉本 均

### ◎ 共同研究

名 称 ・ 目 的	共同研究相手方	担当者
(名称) 情動情報の知覚と表出、および言語情報との発達の関連に関する研究	独立行政法人科学技術振興機構 分任契約担当者 イノベーション推進本部長 北澤宏一	明和 政子

## ◆ ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高めハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成24年度は、平成25年2月21日(木)に開催し、本学カウンセリングセンター講師 中川純子氏による講演が第1会議室であり、教員、事務職員、学生の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。

## 諸 報

### ◆ 新任教員・事務職員紹介 (「 」内は本人の抱負)



### 濱 貴子 助教

所属講座：教育社会学講座  
専 門：教育社会学

「4月に着任いたしました。助教としての様々な職務を通じて勉強させていただきますとともに、研究により一層精進してまいります。」



### 中 藤 信 哉 特定助教

所属講座： 附属臨床教育実践研究センター  
専 門： 心理臨床学

「4月から着任いたしました。臨床教育実践研究センターでの様々な活動に、一つ一つ丁寧に組み込んでいきたいと思っております。」



### 鹿子木 康 弘 特定助教 (新学術領域研究)

所属講座： 教育方法学講座  
専 門： 発達科学・発達心理学

「4月からお世話になっております。不慣れなことが多々あり、ご迷惑をおかけするかもしれませんが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。」



### 高 橋 雄 介 特定助教 (研究拠点)

所属講座： 教育認知心理学講座  
専 門： 教育心理学

「4月に高等教育から教育認知へと学内で異動して参りました。新たな場所で新たな気持ちを持って教育・研究活動に励みます。」

## 訃 報

### 小 林 哲 也 名誉教授

小林哲也先生は、平成25年5月1日逝去された。享年86歳。昭和28年東京大学文学部卒、国際基督教大学助教授、京都大学教育学部助教授を経て、昭和49年教授（比較教育学）、昭和58年教育学部長。平成2年停年退官。比較教育学の方法論及び国際的教育諸問題の比較研究を中心に先駆的で独創的な研究を行い、その研究は広く内外で高く評価された。

## ～ 編 集 後 記 ～

時代の変化が大きな時代には、教育への関心が高まる傾向があるように思われます。見通し難い時代の舵取り役としての子どもたちに期待がかけられるせいでしょうか。それとも、むしろ不安定な未来を象徴する存在として彼らが不安のまなざしで見つめられるせいでしょうか。いずれにしても、変動の時代は、教育がいかに迷めいた営みであるかということに、あらためて気づかされる機会に満ちています。

『ニュースレター』第26号をお届けし、教育学研究科の〈現在(いま)〉をお伝えいたします。京都大学東京オフィスにおける「教育を考える」連続講義、「卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム」における「実践知」をめぐる多角的な討議など、〈人間〉について、〈社会〉について、また両者をつなぐ営みとしての〈教育〉について、より真摯で多様な問いかけが必要とされるこの時代に対応すべく試みられた諸活動の報告が含まれております。原稿執筆をお引き受けくださった方々、また資料をご提供くださった方々に、この場を借りて感謝申し上げます。(JY)



## 京都大学教育学研究科 ・ 教育学部広報委員会

- 委員長 角野 善宏 教授(臨床心理実践学講座)
- 委員 前平 泰志 教授(教育学研究科長・教育学部長)
- 委員 山名 淳 准教授(教育学講座)
- 委員 南部 広孝 准教授(比較教育政策学講座)
- 委員 吉井 晃 事務長
- 委員 谷川嘉奈子 総務掛長
- 委員 片山 正 教務掛長

### 事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛  
TEL 075(753)3003